Ⅰ　教育長挨拶

新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大により、日常生活が一変しました。学校は、急遽の臨時休業を余儀なくされ、学校再開後も「学校の新しい生活様式」を踏まえ、感染拡大防止に対応する中で、教育活動を進めることとなりました。一方で、多くの学校行事の中止や縮小、対話活動が制限される中で人と人のつながりが希薄となりました。また、感染者や医療従事者への不当な差別や誹謗中傷などの社会的な問題も生起しました。そのような中で、人間関係の構築の在り方とともに、「特別の教科　道徳」（以下、道徳科）を要とし、全教育活動で行う道徳教育の一層の充実を図る必要性について考えさせられたところです。

道徳科では、目先の諸課題への対応ではなく、児童生徒が道徳的価値を自覚し、自己の生き方についての考えを深め、日常生活や今後出会うであろう様々な場面において、道徳的価値を実現するために適切な行為を主体的に実践できるような道徳性を育てることを目指しています。児童生徒が、自分自身、相手、集団や社会、自然等との関わりの中で人間としてどんな生き方がよいのかしっかりと考える機会として、これまで以上に「考え、議論する道徳」を追求し、授業改善を図る必要があります。

また、中央教育審議会答申で「令和の日本型学校教育」が示され、学校教育を支える基盤的なツールとしてＩＣＴ活用の必要性が述べられています。道徳科においても、「１人１台端末」を効果的に活用した実践を蓄積していかなければなりません。しかしながら、新学習指導要領の着実な実施が前提であり、ＩＣＴを活用することが目的化することなく、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行っていかなければなりません。

本年度も「道徳教育推進協議会」の皆様には、本町の道徳教育の牽引的役割を果たしていただきました。次年度におきましても、温かい人間関係づくりを基盤に、児童生徒一人一人の思いや考えが大切にされる道徳教育を行いながら、更なる充実を図っていただくことを願います。

結びに、この１年間の取組に対しまして、深く敬意を表するとともに、御指導いただきました広島県教育委員会、広島県東部教育事務所の皆様はじめ、多くの指導者の皆様方に心から感謝申し上げ、御挨拶といたします。

世羅町教育委員会 教育長　**松浦　ゆう子**

Ⅱ　会長挨拶

「特別の教科　道徳」（以下、道徳科）においては、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に深く考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力・心情・実践意欲と態度を育てることを目標としています。また、発達段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を自分事としてとらえて向き合う「考え、議論する道徳」への転換が求められております。今後は、これまで私たちが積み上げてきた指導の蓄積を生かしながら、問題解決的な学習や体験的な学習などを含めた質の高い多様な指導方法について、さらに実践や研究を深め、その成果を共有することがますます必要となっています。

広島県教育委員会では、「広島版『学びの変革』アクション・プラン」で推進している、学んだ知識を活用し、協働して新たな価値を生み出すことができる力を身に付けることを目指しています。道徳科の授業も「主体的な学び」となるように、改善・充実を図っているところです。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、長期間にわたる臨時休業を余儀なくされ、過去に経験したことのない多くの課題が学校現場に押し寄せました。各種研究会は中止になり、研修の推進も難しくなりました。しかし、どの学校も、少人数で研修を行うなどの感染症対策を取りながら、できる限りの研修を行ってきました。その成果が第３回定例会の発表に表れていたように思います。どの学校も、設定したテーマに沿った取組ができており、他校の参考になっていました。また、来年度から導入される「１人１台端末」を効果的に活用し授業改善を推進するため、ＩＣＴを活用した授業づくりについての研修も実施することができました。道徳教育推進教師の皆さんを中心とした各校のこのような研究の積み重ねが、道徳科の目標の実現に大きく寄与するとともに、世羅町の道徳教育を大きく前進させていると思っております。

結びになりましたが、今年も１年間、世羅町教育委員会教育長　松浦　ゆう子様をはじめ世羅町教育委員会の皆様には、熱心で的確なご指導、ご助言をいただきました。本当に感謝しております。今後とも、本協議会の充実のために、ご指導・ご助言をいただきますことをお願い申し上げ、ご挨拶といたします。

世羅町道徳教育推進協議会 会長　福光　裕次

Ⅲ 令和２年度研究概要

1　研究テーマ

郷土を愛し、夢や志を抱く児童生徒を育てる道徳教育

～ 道徳科における「主体的・対話的で深い学び」を通して ～

2　研究のねらい

ふるさと世羅を基盤とし、道徳科における「主体的・対話的で深い学び」の実践研究を通して、郷土を愛し、夢や志を抱く児童生徒を育成する。

3　研究内容

（１）道徳科における「主体的・対話的で深い学び」

- ○　主体的に道徳性を育むための指導
- ○　多様な考え方を生かすための言語活動
- ○　問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導
- ○　情報モラルと現代的な課題に関する指導
- ○　家庭や地域社会との連携による指導

（２）道徳科における学習状況及び成長についての評価

（３）道徳科の授業公開

- ○　参観日等における道徳科の授業公開【全学級実施】
- ○　道徳懇談会の実施【各校１回以上】

（４）研修の改善・充実

- ○　実務担当教諭を中心とし、各道徳教育推進教師が設定した研修テーマに基づいた実践研究（授業研究を含む）
- ○　道徳科「学習指導案」の改善・充実
- ○　道徳科の理論（「主体的・対話的で深い学び」及び「評価」のポイント）と実践（学習指導案等）をまとめた「報告書」の発行と活用

4　研究経過

月	日	曜	内容【会場】
5	18	月	**総　　会　※文書提案** ○ 役員・規約について ○「令和２年度研究計画」について ○「道徳科学習指導案の様式例」について等
11	18	水	**第１回定例会【甲山中学校】** ○ 研究授業（第２学年） ＜主題名＞　伝統を創るもの （C：よりよい学校生活、集団生活の充実） ＜教材名＞「受けつがれる思い」 ＜授業者＞　谷川　哲也　教諭・津森　佑平　教諭 ○ 研究協議 ・発問は、生徒の思考を促すものであったか。 ・かかわり合いの活動は効果的であったか。 ○ 指導講話 広島県東部教育事務所　指導主事　藤井　善貴　先生 ○ 指導講話 広島県教育委員会　指導主事　渡辺　　剛　先生 ○ 講演「主体的・対話的で深い学びを促す道徳科の授業づくり －主題解釈・教材解釈の視点から－」 広島大学大学院教育学研究科　教授　宮里　智恵　先生
12	9	水	**第２回定例会【せら文化センター】** ○ 協議 「道徳教育の推進と道徳推進教師の役割」 世羅町教育委員会　主査（兼）指導主事　池内　佑介 ○ 指導講話 「道徳科におけるカリキュラム・マネジメントの実際」 広島県東部教育事務所　指導主事　藤井　善貴　先生
2	9	木	**第３回定例会【せら文化センター】** ○交流「自校における道徳科の実践事例」 ○講義・演習 「ＩＣＴを活用した授業づくり」 世羅町教育委員会　主査（兼）指導主事　池内　佑介

5　検証

（１）児童生徒　　◎目標値達成　↗第１回比増　↘第１回比減

指標	目標	第１回（５月）	第２回（２月）
「『道徳の授業』の学習は楽しい」と肯定的に回答する児童生徒の割合	90%以上	89.0% (小)88.0% (中)90.0%	90.1%◎ (小)88.1%↗ (中)92.2%↗
「『道徳の授業』では、自分のことを振り返りながら考えている」と肯定的に回答する児童生徒の割合	95%以上	92.3% (小)89.3% (中)95.4%	93.3% (小)92.0%↗ (中)94.6%↘
「『道徳の授業』では、友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている」と肯定的に回答する児童生徒の割合	95%以上	91.4% (小)87.2% (中)95.7%	93.6% (小)92.2%↗ (中)95.0%↘
「将来の夢や目標をもっている」と肯定的に回答する児童生徒の割合	95%以上	87.1% (小)89.0% (中)85.1%	87.6% (小)92.2%↗ (中)83.0%↘
「今住んでいる地域が好きだ」と肯定的に回答する児童生徒の割合	95%以上	93.3% (小)95.4% (中)91.1%	92.2% (小)95.9%↗ (中)88.5%↘

（２）教　　師　　◎目標値達成　↗第１回比増　↘第１回比減

指標	目標	第１回（５月）	第２回（２月）
「『道徳の授業』では、多様な指導方法の工夫を取り入れている」と肯定的に回答する教師の割合	100%	89.6% (小)100% (中)79.2%	93.4% (小)94.2%↘ (中)92.6%↗
「『道徳の授業』では、児童生徒が自分のことを振り返りながら考えるような指導の工夫をしている」と肯定的に回答する教師の割合	100%	97.9% (小)100% (中)95.8%	100%◎ (小)100% (中)100%↗
「『道徳の授業』では、児童生徒が友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりするような指導の工夫をしている」と肯定的に回答する教師の割合	100%	91.4% (小)100% (中)82.7%	99.0% (小)98.1%↘ (中)100%↗
「家庭・地域社会と連携した道徳教育が進められていると思う」と肯定的に回答する教師の割合	100%	72.6% (小)100% (中)45.2%	82.1% (小)84.6%↘ (中)79.5%↗

Ⅳ　実践事例①

「情報モラルと現代的な課題に関する指導」

＜甲山小学校＞

- 学　年　　第５学年
- 主題名　　「よりよい友達関係」　【Ｂ：友情、信頼】
- ねらい　　メールの内容が間違って伝わってしまったことから、友達を傷つけてしまうことになった主人公の気持ちを考えることを通して、友達関係を築くためには、相手の立場になって信頼し合うことが大切であることに気付き、友情を深めていこうとする道徳的な態度を育てる。
- 教材名　　「知らない間のできごと」（出典：「小学道徳　生きる力　５」（日本文教出版））
- 主題設定の理由

〔主題観〕

本主題は、小学校第５学年及び第６学年の内容項目【Ｂ：友情、信頼】「友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと。」に基づくものである。児童は、これまで以上に友達を意識し、仲のよい友達との信頼関係を深めていこうとしたり、趣味が同じ友達と閉鎖的な仲間集団を作ったりする傾向がある。そのため、友達関係に対して悩みを抱く児童も増えてくることから、健全な友達関係を築いていこうとする態度を養う必要がある。

〔児童観〕

本学級の児童は、１学期よりは男女関係なく遊んだり、声をかけ合ったりする姿が増えた。また、行事等では目標達成に向けて、応援したりサポートしたりする児童が多かった。しかし、自分の考えや感じたことを中心に行動し、相手の立場に立って考えることが十分ではない児童もいる。自分の発言や態度が相手を傷つけてしまうことに気付けない児童もいるため、相互理解と友情についての考えを深めることができるようにしたい。

〔教材観・指導観〕

本教材は、転入してきたあゆみとみかのそれぞれの回想が書かれている。あゆみが携帯電話を持っていないことからみかは「あゆみは友達が少ないのでは。」という憶測のメール送った。あゆみを傷つけてしまう人間関係のトラブルを題材にしている。

指導に当たっては、軽率なメールにより友達を傷つける結果を招いてしまったみかの行動や思いを通して、互いに高め合えるよりよい友達関係を築くために大切なことは何かを考えさせたい。その際、ペアトークを取り入れて自分の考えや友達の考えについてやりとりさせ、新しい発見や自分の考えを深められるようにする。

本校の研究テーマ「情報モラルと現代的な課題に関する指導」に関しては、今後より一層社会の情報化が進み、携帯電話等をもつ児童が増え、使用する頻度が高まることによって、トラブル等が起こることも予想される。本学級の児童は、２３人中１５人が自分用としてゲーム機やタブ

レットを持っており、いつでも誰とでも通信できる状態であるとわかった。さらに、通信機器を使って、友達とやり取りをしたことがある児童が23人中14人いることもわかった。本時では、みかが勝手な思い込みで書いたメールが友達関係に及ぼした影響を考えることで、正確に情報と向き合い、他人や社会への影響を考えて行動することの大切さに気付かせたい。

児童は総合的な学習の時間で、事例で学ぶNetモラルの「えっ！こんな人だったの！」「私の写真、誰が見ているの？」を視聴し、SNS使用する際の注意点を学んでいるので、そこでの学習を本時の学習とつなげて、情報モラルに関する認識を深めさせたい。

また、事例で学ぶ学校情報セキュリティの事例「詐欺メール」「メールとファックスの誤送信」から、指導者自身がメールの危険性や注意を払うべき内容を学んだ。そこで、大人として遵守すべき情報モラルについて、指導者自身が認識をもって指導に当たるようにする。メールの怖さ（拡散することや内容が変わって伝わっていく等）についても理解させるとともに、情報機器の活用に当たっては、慎重な行動が不可欠であることを認識させたい。

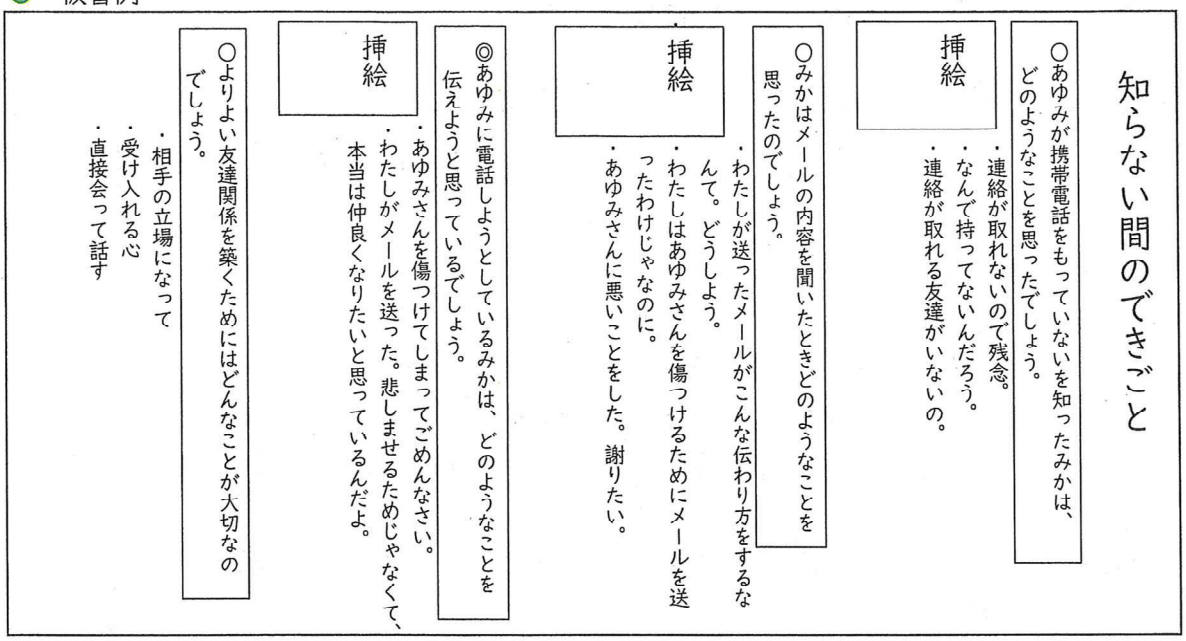
● 準備物　場面の挿絵、タブレット、アンケート結果

● 学習指導過程

	学習活動	○主な発問　・予想される心の動き	※指導上の留意点 ☆評価の観点
導入	1「友達関係」に関するアンケート結果について話し合う。	○「よい友達とはどんな関係のことをいうのでしょう。」 ・協力したり、助け合ったりできる関係。 ・信頼していて相談できる関係。	※児童の興味を喚起するためにアンケート結果を提示し、本時の主題につなげる。
展開	2　教材「知らない間のできごと」を読んで話し合う。	○「あゆみが携帯電話をもっていないを知ったみかは、どのようなことを思ったでしょう。」 ・連絡が取れないので残念。 ・なんで持ってないんだろう。 ・連絡が取れる友達がいないの。 ○「みかはメールの内容を聞いたときどのようなことを思ったのでしょう。」 ・わたしが送ったメールがこんな伝わり方をするなんて。どうしよう。 ・わたしはあゆみさんを傷つけるためにメールを送ったわけじゃないのに。 ・あゆみさんに悪いことをした。謝りたい。	※転入生のあゆみと仲良くなりたいと思っているみかの思いを押さえる。 ※あゆみが携帯電話を持っていないと知ったみかが驚き落胆した思いを押さえる。 ※みかの勝手な憶測でメールの内容が少しずつ変わって情報が広まってしまったことを押さえる。 ※情報モラルの観点から、メールの怖さについても考える。

展開	3　よりよい友達関係について考える。	◎「あゆみに電話しようとしているみかは、どのようなことを伝えようと思っているでしょう。」 ・あゆみさんを傷つけてしまってごめんなさい。 ・わたしがメールを送った。悲しませるためじゃなくて、本当は仲良くなりたいと思っているんだよ。 ○「よりよい友達関係を築くためにはどんなことが大切なのでしょう。」 ・友達の気持ちを考えて行動すること。 ・直接友達と会って話すことで信頼し合える。	※「道徳ノート」に考えを書かせる。 ※書いたことをペアで交流し、その後全体で話し合わせる。 ※みかの反省の気持ちとこれから仲良くなっていきたいという思いに気付かせ、信頼し合うためには互いを理解することが大切であることを押さえる。
終末	4　自分と友達との関係について振り返る。	○「友達との付き合い方で、大切にしたいことは何ですか。」 ・これからは相手の立場や気持ちを考えて、自分の考えも伝えられるようにしたい。 ・自分と違うことがあっても、受け入れようとしていきたい。 ・メールなどのやり取りだけでなく、直接友達と話したり遊んだりすることを大切にしたい。 ・不確かな情報を勝手に流して、友達を傷つけない。	※総合的な学習の時間での学習を想起させ、情報モラルに関する認識をより深めさせる。 ※自分の課題とよさに気づくことができるようにする。 ☆友達との付き合い方で大切なことを考えるとともに、これからの行動につなげる意欲をもっている。

● 板書例



● 成果と課題

〔成　果〕

・導入でどんな友達関係を築いていきたいかを確認していたことで、振り返りの場面ではこれから友達との関り方で大切にしていきたいことを一人一人の考えについて発表することができた。

・よりよい友達関係を築くために大切なことを出し合う中で、総合的な学習の時間で学んだことを関連付けることによって、情報モラルの大切さにも気づかせることができた。

・教師の情報セキュリティの知識を高めるために、事例で学ぶ学校情報セキュリティのｅラーニングを活用した。メールを使用する際、注意点や危険性など、情報セキュリティについての理解を確かなものにし、児童への指導に生かすことができた。

・情報モラルが、より身に付くように総合的な学習の時間や特別活動と関連付けて指導を行っている。今年度さらに児童実態とつけたい力を明確にし、情報モラルの動画コンテンツを活用したことで、系統的な指導ができた。

〔課　題〕

・情報通信機器を使用している児童が増えてきている中、児童がどのようにこれらを利用しているかを把握することがより効果的な指導につながると考える。そのためには、学校の指導について保護者へ情報発信を行い、家庭と学校とが情報を共有し、問題意識をもって児童の情報モラルを育成していくことが必要と考える。

〔今後の「改善・充実」に向けて〕

・登場人物の行動や心情を本時のねらいとする情報モラルにどうつなげ、焦点付けていくか課題として残った。授業の終末で本時のねらいに迫る発問をしたり、板書の工夫を行ったりすることが必要である。

・各教科、各領域との関連を工夫し・改善し、情報モラルを育成するためのカリキュラム・マネジメントの充実を図る。

Ⅳ　実践事例②

「道徳科における学習状況及び成長についての評価」

＜せらひがし小学校＞

- 学　年　　第５学年
- 主題名　　「正義の実現」【Ｃ：公正、公平、社会正義】
- ねらい　　みんなの前で言うことを決めた吉野さんの思いを考えることを通して、正義を実現するためには間違っていることを間違っていると言える勇気が大切であることに気づき、周りに流されず、公正、公平に行動しようとする道徳的態度を育てる。
- 教材名　　「名前のない手紙」(「小学道徳　生きる力　５」(日本文教出版))
- 主題設定の理由

〔主題観〕

本主題は、小学校第５学年及び第６学年の内容項目【Ｃ公正、公平、社会正義】「誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現に努めること。」に基づくものである。これは、第３学年及び第４学年の「誰に対しても分け隔てをせず、公正、公平な態度で接すること。」を受け、中学校の「正義と公平さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。」に繋がっていく。

人は社会の中で、自分とは異なる他者と関わり合って生きている。その社会の中で、一人一人が確かな自己実現を図っていくためには、差別や偏見がなく、どんな人でも分け隔てなく大切にされる社会であることが必要である。しかし、人間は、自分と異なる感じ方や考え方、多数でない立場や意見などに対して偏った見方をしたり、自分よりも弱い存在があることで優越感を抱きたいがために偏った接し方をしたりする等、不公正な弱い心をもっている。そのような人間の弱さを乗り越えて、自他の不公正を許さない断固とした正義感をもち、互いを公平に大切にすることが重要である。

高学年の段階においては、差別や偏見がいじめなどの問題に繋がることを理解できるようになる一方で、いじめなどの場面に出会った時、傍観的な立場に立ち、問題から目を背けることも少なくない。そこで、中心人物や周りの人物の心情を考えさせることで、周りの雰囲気や人間関係に流されることなく、自分の意志を強くもって正義を実現しようとする態度を育てたいと考え、本主題を設定した。

〔児童観〕

本学級の児童は、全体的に男女共に仲がよいが、アンケートの結果からは、自分の思いや言いたいことがあっても、周りの目を気にして言えない等、周りの雰囲気に合わせて行動している児童も多い。事前に行ったアンケートの結果は次の通りである。

実施日６／12　実施人数 19 人

<table>
<tr><th>質問項目</th><th>できる</th><th>まあまあ
できる</th><th>あまり
できない</th><th>できない</th></tr>
<tr><td>①友達がいじめられているのを見たとき、やめさせようとすることができますか。</td><td>42%（8人）</td><td>11%（2人）</td><td>36%（7人）</td><td>11%（2人）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">②どうしてですか。</td><td colspan="2">できる</td><td colspan="2">できない</td></tr>
<tr><td colspan="2">・助けてあげたい。
・少し怖いけど、できる。
・思い切って言う。
・友達が学校に来なくなったら悲しい。
・放っておくともやもやする。
・受けた人じゃなくても、見ているだけで嫌になる。
・今までもやめさせたことがある。
・大事な友達だから。
・友達は、一番の仲間だから。</td><td colspan="2">・勇気がない。
・緊張する。
・助けようとして自分がやられたら困る。
・見て見ぬふりをする。
・年下だったらできるけど、年上だとできない。
・いじめられている人による。
・先生を呼びに行くことはできるけど、直接やめさせることはできない。</td></tr>
<tr><td>③「正義」とは、どんなことだと思いますか。</td><td colspan="4">・人を守ること。
・困っている人を助けること。
・自分が犠牲になっても、誰かを助けること。
・けんかやいじめを止めること。
・みんなの味方。
・思いやりや親切。
・迷わず立ち向かっていくこと。
・正しいことを進んでやること。
・正しいと分かっていることを、生活にいかすこと。
・いけないことはいけないと言うこと。
・みんなと公平に過ごせて、みんなと協力できること。</td></tr>
</table>

上記のアンケートの結果から、正義を実現できる児童も多いが、いけないこととは分かっていても、勇気が出なかったり自分の保身を考えたりして、正義の実現に踏み切れない児童も多い。そこで、正義を実現するには誰でも勇気が必要であることに気付かせるとともに、正義を実現することの大切さや、そのよさについて考えさせることで、正義を実現したいという気持ちに繋げたい。

〔教材観・指導観〕

本教材は、クラスのリーダー的存在であるミッコが、「わたし」を仲間外れにしようと指令を出したことから始まる。仲間外れになった「わたし」は、抗議もできず疎外感にかられる日々が

続く。あるとき、「わたし」の筆箱に名前のない励ましの手紙が入るようになり、「わたし」の心の支えとなる。そして、転校する吉野さんの告白をきっかけに、仲間外れをしていたクラスの悪い状況を打ち破る勇気の声が次々と上がるという内容である。

指導に当たっては、吉野さんの行動がクラスを動かす場面と、そこに至るまでクラスメイトが「わたし」を無視し続けていることに着目させ、クラスの弱さや本心に迫るようにするとともに、勇気をもって社会正義を実現しようとする心情を育てるため、次の５点に留意する。

①導入では、「正義」についての事前アンケートの結果を提示する。ねらいとする価値への方向付けを行うとともに、「正義をもち、正しい行いをするには、どんなことが大切なのだろう。」という課題意識を持たせる。

②展開前段では、手紙を書いた子はクラスの他の子と同じようにいじめをしているのだが「わたし」のことをなんとかしたいという気持ちと、自分自身の身も守らなければいけないという葛藤から、やむなく手紙に名前を書けなかったことに気づかせる。また、自分だったら吉野さんのように言えていたかどうかを考えさせることで、人間の弱い部分に共感させるとともに、みんな「仲間外れはいけない。やめさせたい。」という思いをもっていることに気づかせる。

③中心発問では、吉野さんがみんなの前で発言した意図や思いをしっかり考えさせる。もしかしたら自分も嫌われるかもしれないという思いを思い出させ、それでも言った吉野さんの姿から、正しいことをしたい、友達を助けたいという強い思いに気付かせる。また、吉野さんと他のみんなとの違いを考えさせることで、正義の心をもつだけでなく、実際に行動に移すことが大切であることを考えさせる。

④展開後段では、正義の心をもち、正しいことを行うためにはどんなことが大切かを考えることを通して、正義を実現するために大切なことを考えさせる。正義の実現の為には周囲の雰囲気や人間関係に流されず、間違っていることを間違っていると勇気をもって言える態度が大切なことに気付かせる。

⑤終末には、振り返りの視点を示すことで、新しい考えや課題を見つけよりよい生き方について考えられるようにする。

本校の研究テーマ「道徳科における学習状況及び成長についての評価」に関しては、次の３点に留意する。

①教材の学習では、本時の課題に対する納得解を見つけられるようにする。

②教材の学習に留まらず、主題について考えさせる。

③終末に視点に沿って振り返りを記述させることで、児童の成長の様子を見取るようにする。

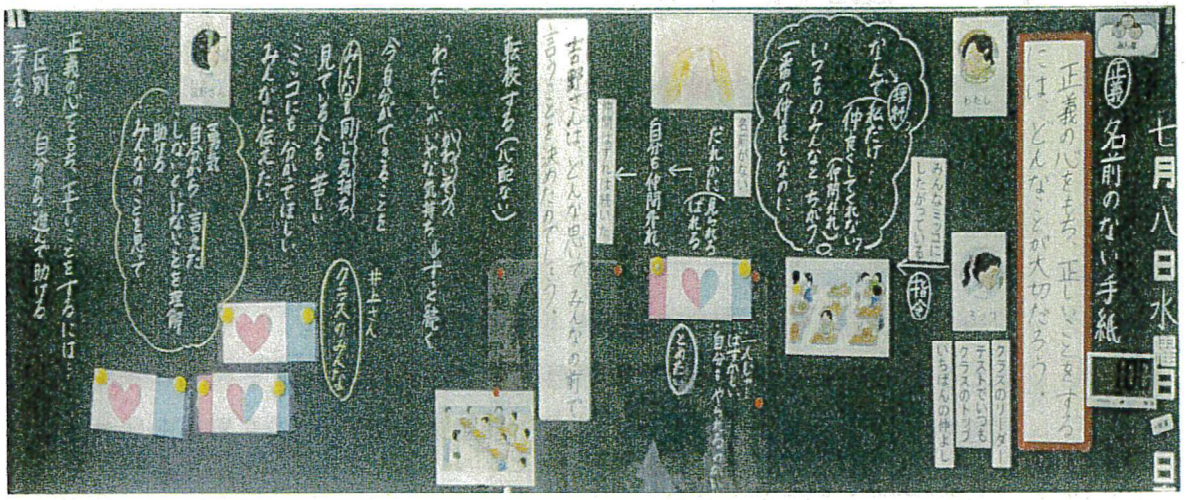
また本時では、中心発問を行う前に心情メーターを用いて「自分だったらどうか」を考えさせ、学習の後半で再度心情メーターを用いることで、児童の学びの深まりを評価することができるようにする。

- 準備物　　事前アンケートの結果、場面絵、道徳ノート、心情メーター
- 学習指導過程

	学習活動	○主な発問　・予想される心の動き	※指導上の留意点 ☆評価の観点
導入	1　課題意識を持つ。	○「今日のテーマ「正義」について、事前アンケートの結果を紹介します。」 **正義の心をもち、正しいことをするにはどんなことが大切だろう。**	※事前アンケートの結果を提示することで、ねらいとする価値への方向づけを図る。
展開	2　教材「名前のない手紙」の範読を聞き、考え、話し合う。	○「ひとりぼっちになった『わたし』は、どんなことを考えているでしょう。」 ・つらい。寂しい。 ・いつまで続くんだろう。 ・調子に乗らなければよかった。 ・一番の仲良しだったのになぜ。 ○「手紙をくれた人は、どうして名前を書かなかったのでしょう。」 ・ミッコにばれるかもしれないし、ばれたら自分も仲間外れにされるから。 ・自分もいじめに加わっているので、申し訳ない気持ちがあったから。 ○「自分だったら吉野さんみたいに言えますか。」 **◎中心発問** **「吉野さんは、どんな思いで、みんなの前で言うことを決めたのでしょう。」** ・最後にきちんと謝りたい。 ・このまま言わずに転校したら、後悔する。 ・仲間外れをなくしたい。 ・これは自分にしかできない。 ・みんなに、間違っていることをしていると気付いてほしい。 ・いいクラスになってほしい。	※全文を範読後、概要を押さえる。 ※仲間外れにされた「わたし」の寂しくもやるせない気持ちに共感できるようにする。 ※「わたし」のことを助けてあげたいと思いつつも、自分の身を守りたいという思いももっていることを押さえる。 ※心情メーターを用いてペアトークを行わせる。 ※道徳ノートを使い、吉野さんの意図や思いをしっかり考えさせる。 ※最初は手紙を書くだけで、大きな行動に移せなかった吉野さんが、みんなの前で打ち明けようと思った心の変化を捉えさせる。

展開		＊より深めるための発問 「吉野さんと他のクラスのみんなの違いはどこでしょう。」 ・勇気を出した。 ・一人でも言った。 ・周りに流されなかった。 ・思うだけじゃなく、行動した。 ・自分は嫌われてでも助けたいと思っている。 ・自分よりも友達のことを大切にしている。	※道徳ノートの下の欄に考えを書かせる。 ※ペアトークを行わせ、考えを深めることができるようにする。
	3　正義の心をもち、正しいことをするために大切なことについて考える。	○「正義の心をもち、正しいことを行うためには、どんなことが大切ですか。」 ・勇気を出して正しいことを行うこと。 ・思ったことは行動に移すこと。 ・周りに流されない強い気持ちを持つこと。 ・正しくないことは許さないという気持ち。	※吉野さんもみんなも、「仲間外れはいけない。」「やめさせたい。」という思いをもっているが、行動に移すことが大切であることに気づかせる。 <キーワード> ・間違っていることを許さない。 ・正しいことを行動に移す。
終末	4　本時の振り返りをする。	○「『正義をもち、正しいことをすること』について今日の学習を振り返りましょう。」 ・今日新たに分かったことは、正しいことをするためには、周りに流されず、いけないことはいけないと言うことが大切だということです。これからは、いけないことをしている人がいたら、勇気をもって言おうと思います。 ・正しいことをするのは勇気がいるけど、相手やみんなのことを考えて、勇気を出して正しいことをしていきたいなと思いました。	※ワークシートに「①今日新たに分かったこと、考えたこと②今の自分について振り返り、これから生かしたいこと」という視点で振り返らせる。 ☆正義の実現に対して自分の生活を振り返り自分のよさや課題を見つけ、よりよい生き方について考えている。

● 板書例



● 成果と課題

〔成　果〕

・事前アンケートを最初に提示することで、学級の実態から課題設定を行うことができた。

・心情メーターを２回用いることで、児童の考えの変化、深まりが分かりやすかった。

・重点内容項目を設定し、その内容項目の学習が他教科のどの学習に結びつくか年間計画に明記したことで、横断的に道徳教育を行えるようにした。

・振り返りのワークシートを同じ内容項目ごとに分けることで、以前の学習との変化・深まりを評価できた。児童自身も自分の成長を実感できた。

・毎月「道徳振り返り朝会」を行い、道徳で学んだことが他教科や生活にどのように結びついているか、具体的に考えさせることができた。

・年度の前半と後半に重点内容項目についての児童アンケートを行い、学校全体で見た時の児童の成長や実態を把握できるようにした。

〔課　題〕

・本時で児童から出た道徳的価値が、別の内容項目の方に寄ってしまった。授業を考える際、その課題でねらう道徳的価値に辿り着けるかどうか、しっかり検討する。

・「いじめをとめたいけどとめられない」といった、道徳的な「難しさ」を越えていくための手立てが必要。（➡役割演技でその難しさを体験させる等。）

・重点内容項目の学習が他教科のどの学習に結びつくか年間計画に明記し、横断的に道徳教育を行えるようにしたが、十分意識できていなかった。学校全体で取り組むことができるよう、研修等を充実させていく。

〔今後の「改善・充実」に向けて〕

・自分の思いやねらいを明確にもち、そこに向かうためのめあてを設定する。

・考えが変化した際、なぜそのように変わったかという中身の部分をしっかり引き出すことで、児童の学びの深まりをさらに評価できるようにする。

・日頃から道徳で学んだことが生活の中にどう結びついているかを意識し、振り返り朝会以外でも、進んで学習と生活を結び付けていけるようにする。

Ⅳ　実践事例③

「主体的に道徳性を育むための指導」

【世羅小学校】

- 学　年　　第５学年
- 主題名　　「相手の立場もたいせつに」【B：相互理解、寛容】
- ねらい　　よし子とえり子のすれちがいの原因や、お互いを理解するために大切な気持ちを考えることを通して、自分と異なる意見や立場を尊重しようとする道徳的態度を育てる。
- 教材名　　「すれちがい」(「小学道徳　生きる力　５」(日本文教出版))
- 主題設定の理由

〔主題観〕

本主題は、小学校第５学年及び第６学年の内容項目【Ｃ：相互理解、寛容】「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心をもち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること。」に基づくものである。

寛大な心をもって他人の過ちを許すことができるのは、自分も過ちを犯すことがあるからと自覚しているからである。自分に対して謙虚であるからこそ他人に対して寛容になることができる。しかし、自分の立場を守るため、つい他人の失敗や過ちを一方的に非難したり、 自分と異なる意見や立場を受け入れようとしなかったりするなど、自己本位の考えに陥りやすい弱さをもっている。自分自身を謙虚に見つめることで、他人の過ちを許す態度や相手から学ぶような広い心をもつことが大切である。相手の意見を素直に聞き、相手の立場に立って考える態度を身につけ、異なる意見や立場にも広い心で対処できるようにさせたい。本教材は、自分はおとなしくてあまり人にほめられないと思っていた主人公の「りさ」が、先生にほめられて、小さい子の面倒をよくみる優しさが自分のよさであることに気付き、とても嬉しくなるという内容であり、技能面に偏りがちな友達のよいところを見つける際の視点を性格面にも広げることのできるものである。

〔児童観〕

本学級の児童は、時に自分の立場を優先しすぎて、友達の立場を思いやることができなかったり、心無い言葉で相手を傷つけてしまったりすることがある。これは、頭では分かっているが実際その場になると正しい行動がとれないことがあるということにつながっている。

児童の実態　アンケート　（男子 11 名 女子 18 名 合計 29 名）

＜実態調査＞

①相手のことを考えて行動することができますか。

できる(16 人) 少しできる(11 人) あまりできない（2 人）

・分からなくて困っている人に教えてあげたりヒントをあげたりしている

・みんなで行動するとき

・自分のことを先に考えてしまってできない時がある

②友達と、少しのすれ違いでけんかをしてしまったことがありますか。

ある（11 人） ない（18 人）

・言葉が上手く伝わらなかったときけんかになった

・係活動が上手くいかずけんかになった

・自分で腹を立てないようにしている

③友達の失敗を許すことができますか。

できる（20 人） ゆるせないときもある（9 人）

・わざとじゃないなら許せる

・自分も失敗するから許せる

・自分がイライラしているときは許せない

アンケートを見ると、「係活動でけんかになった。」「遊びでけんかになった。」というような記述が多く見られ、友達と折り合いをつけて活動する体験が不足していることが原因の一つになっていると考えられる。子供たちの生活に還元できるよう本授業では、相手の立場になって心情を考える活動を通して、異なる意見や立場にも、広い心で対処できるような児童の育成を目指していきたい。

〔教材観・指導観〕

本校の研究テーマは「豊かなコミュニケーション力を身に付けた児童の育成～ほめて・認めて・励ます指導を軸とした対話的な授業づくりを通して～」である。また、世羅小学校担当の道徳科研究テーマは、「主体的に道徳性を育むための指導」である。

本教材は、「よし子」と「えり子」の二人がちょっとしたすれ違いのために仲違いしてしまった出来事を日記に記したものである。よし子とえり子は一緒にピアノの習い事に行く約束をした。しかし、えり子は母親に買い物を頼まれてしまい、時間どおりに行くことができなくなってしまう。よし子は約束を守らなかったえり子に腹を立て、えり子も話を聞いてくれないよし子に腹を立ててしまう。そしてお互いに付き合いたくないと仲違いをしてしまう内容である。

同じ出来事をそれぞれの立場から書いた資料を用いることで、行動のすれ違いから感情を対立させてしまうことになった事実を通して、広い心で相手の立場を考え、自分と異なる意見も大切にしようとする心情を育てていきたい。

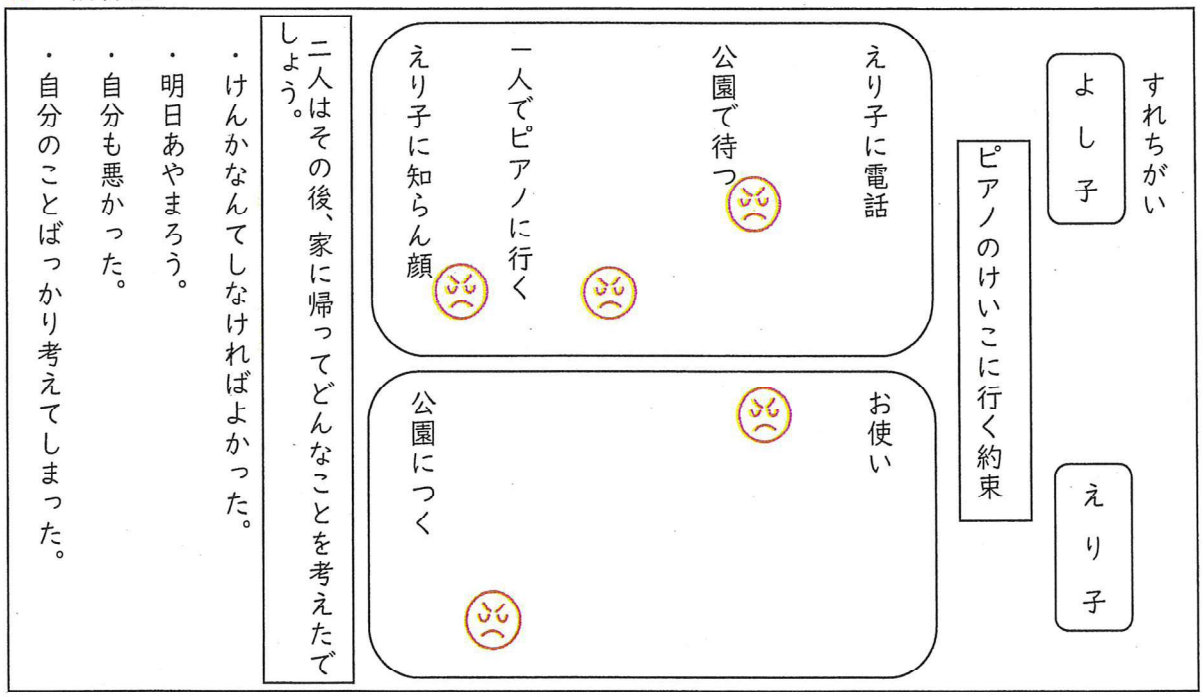
導入では、アンケートの結果を見ながら、誤解から起こってしまったけんかや自分は悪くないのに謝らなければならなかった経験を想起させることで本時のねらいをつかませる。 展開では、よし子とえり子の話を分けて読み、相手のどの行動に腹が立ったのかを全員でおさえることによりそれぞれの立場の主張をはっきりとさせる。さらに、よし子とえり子の気持ちの変化を追うことで、相手を責め、腹を立てても解決にいたらないことに気付かせたい。そして後段では、二人は家に帰ってどんなことを考えたかを考えることで、仲違いしないための行動や仲違いしてしまったあとの行動について考えさせる。そこから、どちらにも相手を思いやる気持ちが足りなかったことにつなげたい。終末では、相田みつをの「セトモノと」を全員で音読し、相手に対してやわらかい心をもつことが大切であると気付かせ、授業の余韻を残しながら終わりにしたい。

- 準備物　　場面絵、発問等の短冊、テレビ、パソコン
- 学習指導過程

	学習活動	○主な発問と予想される児童の心の動き（◎中心発問）	指導上の留意点（☆評価の観点）
導入	1 アンケートの結果を見て感じたことを発表する。	○「アンケートを見て友達とよくけんかになる時はどういう時ですか。」	※学級の実態を理解し教材とのつながりを感じながら進められるようにしていく。
展開	2「すれちがい」を読みよし子とえり子の気持ちをそれぞれ比べながら考え、話し合う。	○「よし子はなぜ怒っているのでしょう。」 ・ずっと待っていたのに連絡もしてくれない。 ・約束を守ってほしい ○「えり子はなぜ怒っているのでしょう。」 ・私にも予定があるのに。 ・みんな自分のことばっかり。 ○「二人は、どうすればけんかにならなかったでしょう。」 ・あやまったのだから許してあげればよかった。 ・お母さんに理由を言って、スーパーに行かないといえばよかった。	※文章の理解が難しい児童が多いという実態を踏まえ、よし子の日記、えり子の日記というように分けて読むようにする。

展開		◎中心発問 「二人はその後、家に帰ってどんなことを考えたと思いますか。」 ・明日謝ろう。 ・けんかなんてしなければよかった。	※自分の生活の中で、友達とけんかした後の気持ちを想起させることにより、自分に置き換えて考えられるようにする。 ☆自分の気持ちだけでなく、相手の立場を考えることができている。 （発言・ワークシート）
終末	3 相田みつをの「セトモノと」を音読する。		※相手に対してやわらかい心をもつことが大切であると気付かせる。

● 板書例



● 成果と課題

〔成　果〕

・感情のマークを板書に活用したことで、感情の変化が全体でとらえやすくなった。

・「よし子とえり子のすれちがいはどこで生まれたでしょう。」という発問を初めの発問にしたことで、すれちがいの原因を考えながら教材文を読むことができた。

・時系列にどういう出来事が起こったのかを整理していくことで、より子とえり子のすれ違いを理解しやすくなった。

・教材を丁寧に読み、すれ違いの原因を考えた。相手の立場を想像して行動することが、すれ違いを生まない方法だと理解することができた。

〔課　題〕

・よし子とえり子のすれ違いを理解すること自体がとても難しかった。そのためできるだけ板書を構造化し視覚的に理解できるようにした。しかし教材の理解に時間をとりすぎてしまい、すれちがいの原因について話し合う時間が十分に取れなかった。

〔今後の「改善・充実」に向けて〕

・内容理解については確認だけにする部分と、子どもに問いかける部分とを明確に分け時間短縮をはかるなどの工夫が必要であった。

・すれちがいとはどういう状況なのかを自分事として考えることができない子どもが多かった。すれ違いに対する経験を出し合う時間を十分にとるなどの工夫が必要であった。

Ⅳ　実践事例④

「問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導」

＜せらにし小学校＞

- 学　年　　第３学年
- 主題名　　「自分に正直に」【Ａ：正直、誠実】
- ねらい　　正直にできないときの後ろめたさ・苦しさや正直に行動することのよさについて深く考えることを通して、正直に明るい心で元気よく生活しようとする道徳的な態度を育てる。
- 教材名　　「まどガラスと魚」（「小学道徳　生きる力　3」（日本文教出版））
- 主題設定の理由

〔主題観〕

本主題は、小学校第３学年及び第４学年の内容項目【Ａ：正直、誠実】「過ちは素直に認め、正直に明るい心で生活すること。」に基づくものである。これは、第５学年及び第６学年では「誠実に、明るい心で生活すること。」に繋がっていく。

人は誰しも自身の過ちや失敗を隠したり、ごまかしたりする弱い心をもっている。しかし、うそやごまかしは、あくまでも一時しのぎに過ぎず、真の解決にはならないうえ、自分自身を苦しめ、他者からの信頼を失うことにもつながる。健康的で積極的に自分らしさを発揮するためには、自分の気持ちに偽りがなく正直であることが大切で、そのような誠実な生き方をしようとする意欲を育てることが重要である。

この時期の児童は、うそを言ったり、ごまかしをしたりしてはいけないことは知っている。しかし、何か失敗をしたり、過ちを犯してしまったりしたときには、とっさにうそやごまかしをして逃れることも多い。そのような行動は他人の信頼を失うばかりか、自分自身の中に後悔や自責の念、強い良心の呵責などが生じることには、まだ充分に気づいていない。自分を偽り、人を欺くことが自他の心を傷つけることに気づかせ、誠実に行動しようとする道徳的な態度を育てたいと考え、本主題を設定した。

〔児童観〕

本学級の児童は、明るく元気で、帰りの会では、友達の良い所“にこにこ”を発表する姿が見られる。クラスで何か起こった時も正直に話ができる児童が多い。一方で、自分の考えをもつことが難しい児童や、考えをもっていても表現の仕方が分からなかったり、自分の考えに自信が持てなかったりする児童もいる。

本学級の児童を対象に、本主題に関連するアンケート調査（実施日１／７　対象人数 17 人）を行ったところ、「今までにうそをついたりごまかしたりしたことはありますか。」という問いに対して、17 人中 15 人の児童が「はい」と答えた。その時なぜそうしたのかという問いには、「怒られるのがこわかったから。」「後で何とかなると思ったから。」などと答えている。けれども、その時の気持ちとしてほとんどの児童が「正直に言った方がいいのかもやもやした。」「やっぱり本当のことを言おうかなと思いながら過ごした。」「どうしようかと怖かった。」「ごまかさな

ければよかった。」「自分は、悪いことをしたな。」「申し訳ないな。」「いつ、ばれるかな。正直に早く言おう。」といった自分自身の中に後悔や正直に言いたい思いが生じたという経験をしている。

これらの実態をふまえ、正直であるからこそ、明るい心で伸び伸びとした生活が実現できることを実感させていくことが大切だと考える。

〔教材観・指導観〕

本教材は、主人公の千一郎が、友達とキャッチボールをしていて、過って窓ガラスを割ってしまうが、悪いと思いつつも謝らずに逃げてしまう。窓ガラスが気になった千一郎は次の日もその次の日も見に行き、「ガラスを割ったのはだれだ？」と書いてある張り紙を見つける。翌日、千一郎の家では、夕飯の魚をねこに取られてしまう。だが、飼い主である近所のお姉さんがそのことを謝ろうと一軒一軒聞いて回る誠実な姿に心を動かされて、正直に謝りに行くという内容である。児童が日常、引き起こしがちな行為を描いており、なかなか謝りにいけない千一郎の気持ちに共感しやすい。また、近所のお姉さんの姿を通して、誠実な行動の「すがすがしさ」や、正直に明るい心で元気よく生活することの良さにも気づかせやすい教材である。

指導に当たっては、千一郎がどうしようか葛藤する心の中を「正直に言えない」「正直に言おう」それぞれの意見を聞くことで、正直にするという道徳的価値の実現を拒む人間の弱さを追求する展開を、本校の研究テーマに沿って考えていく。

本校の研究テーマ「問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導」に関しては、導入時にキャッチボールの役割演技を行う。その中で、ガラスの割れる音を聞かせ、間髪をいれず「逃げろ」と叫び、児童に逃げさせる。その後、いけないことをしてしまった時の気持ちを発表し合う。そのことで、自分達の心の中にもある心の弱さを確認し、だからこそ正直でいるために大切なこととは何だろうかと問いかけることで、問題解決するための課題意識をもてるようにする。教材文でも、文助に「逃げろ」と言われて千一郎は逃げたので、児童に道徳的価値判断をする間もないとっさの体験をさせると同時に教材に引き込み、そのあと葛藤することになる自らの行為への悔いを深めるための方法として、役割演技を取り入れる。展開では、教材を読んだあと、挿絵を見せて話の重要な点を押さえ、「正直に言えない」「正直に言う」のどちらの心に近いかネームプレートを置くことで、自分の気持ちを確認した上での問題解決になるようにする。千一郎がどうしようか葛藤する心の中を「正直に言えない」「正直に言う」それぞれの意見を聞くことで、千一郎の気持ちを多面的に考えたり、同じ「正直に言えない」の所にネームプレートを置いた友達でも少しずつ違う意見を聞いたりすることで多角的に考えたりできるようにするための方法として、ネームプレートを取り入れる。中心発問では、友達の考えにふれ、互いの考えを対話するための方法として、ペアトークを取り入れる。

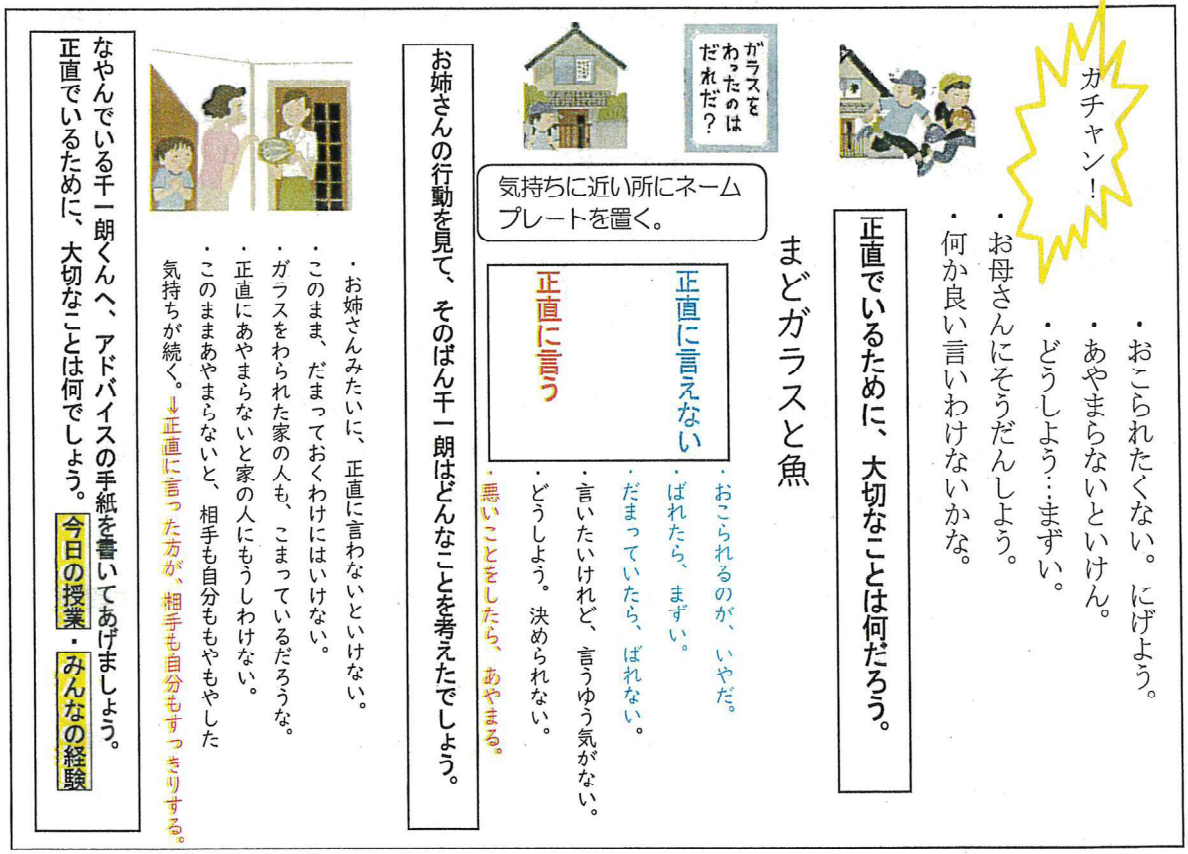
- 準備物　　場面絵、ネームプレート、発問等の短冊、道徳ノート
- 学習指導過程

	学習活動	主な発問と予想される児童の心の動き （◎中心発問）	指導上の留意点 （☆評価の観点）
導入	1　役割演技を通して、教材と同じ場面に立ち会った時の気持ちを考える。	○「キャッチボールをしていて、よその家の窓ガラスを割ってしまった時、どんな気持ちになりますか。」 ・怒られたくないからにげよう。 ・謝らないといけない。 ・どうしよう・・・まずい。 ・お母さんに相談しよう。 ・何か良い言い訳はないかな。 **正直でいるために、大切なことは何だろう。**	※役割演技を行い、いけないことをしてしまった時の気持ちを考え、自分の中にある心の弱さを確認し、だからこそ正直でいるために大切なことは何だろうかと問いかけ、問題意識をもてるようにする。
展開	2　教材「まどガラスと魚」を読んで考え、話し合う。	○「まどガラスと魚」のお話を聞きましょう。自分だったらどんな気持ちになるか、考えながら、聞きましょう。 ○「ガラスをわったのはだれだ？」という紙を見た時、千一朗はどんな気持ちだったのでしょう。 ・怒られるのが嫌だから【正直に言えない】。 ・ばれたらまずいと思うから、【正直に言えない】。 ・だまっていたら、ばれないと思うので【正直に言えない】。 ・悪いことをしたら謝らないといけないから【正直に言う】。 ・いつかばれると思うので【正直に言う】。 ・正直に言いたい。でも、言う勇気がない。 ・どうしよう。決められない。	※臨場感をもち、自我関与できるよう、教師が読み語りで教材提示をしていく。 ※【正直に言えない】【正直に言う】のどちらの心に近いかネームプレートを置くことで、自分の気持ちを確認した上での話し合いになるようにする。

展開		◎中心発問 「お姉さんの行動を見て、その晩、千一朗はどんなことを考えたでしょう。」 ・お姉さんみたいに、正直に言わないといけない。 ・このまま黙っておくわけにはいかない。 ・ガラスを割られた家の人も、困っているだろうな。 ・やっぱり、正直に謝らないと、窓ガラスが割れた家の人に申し訳ない。 ・このまま謝らないと、相手も自分も嫌な気持ちがずっと続く。 ・正直に言ったほうが、自分もすっきりとする。 ＊より深めるための発問 「正直でいるために、大切なことは何でしょう。正直に言おうか悩んでいる千一朗くんのお兄さん・お姉さんになったつもりで、アドバイスの手紙を書いてあげましょう。今日の授業で話し合ったことに関係があって、みんなが今までに経験したことが入っていると、分かりやすくなります。」 ・正直に言うと、気持ちが良いよ。 ・早めに謝った方が、後々悩まずに済んで、気楽に明るく生活できるよ。 ・うそをついて隠していて、後からばれてしまって大変だったことがあるから、すぐに謝った方がいいよ。 ・謝るのは勇気がいるかもしれないけれど、逃げずに謝ると、相手はきっと許してくれるよ。 ・お母さんに嘘をついてしまったことがあるけれど、正直に話したら褒めてもらって、すっきりしたことがあるよ。 ・物を壊した時、怖かったけれど正直に言ったら、もやもやが無くなったよ。	※自分にうそ偽りなく向き合っているお姉さんの姿を見て、正直でいることの大切さについて押さえた後に、千一朗の気持ちに焦点化する。 ※千一朗に自我関与しながら、道徳ノートに考えを書く。 ※ペアで互いの考えを確認し、その後、全体で話し合う。 ※本時の問題「正直でいるために、大切なことは何だろう」と結び付けて考えていけるようにしていく。 ※今までの具体的な経験を振り返ることで、正直で明るい心で元気よく生活しようとする道徳的な態度を育てていく。 ※子どもたちの経験を聞くことで、価値に対するイメージを広げるようにする。 ☆「まどガラスと魚」の教材を通して気付いたことをもとに、正直に行動することが明るい生活につながることを考えることができたか。 （道徳ノート・発表）

終末	3　振り返りをする。	○「今日の道徳の学習で学んだことを書きましょう。」 ・正直にすると、気持ちがいい。 ・相手のためにも、自分のためにも、これから正直な心を大切にしていきたい。	※自分の中にある正直な心を感じながら、余韻をもって終える。

● 板書例



● 成果と課題

〔成　果〕

役割演技　効果音

・導入時に野球をして遊んでいる様子の役割演技を取り入れ、その途中でガラスの割れる効果音を聞かせたことで、児童にも、教材文と似た体験をさせることができ、教材文に引き込むことができた。さらには、役割演技とガラスの割れた音から、その瞬間の心の弱さを確認することができ、本時の「正直でいるために大切なことは何だろう」という問題解決へ進むことができた。

ネームプレート

・「正直に言えない」「正直に言う」のどちらの心に近いかネームプレートを置かせたところ、“悩むけれど、正直に言えないと思う（４人）”“悩むけれど、正直に言えると思う（６人）”“正直に言える（７人）”の３グループに分かれた。どの行動をとるか意思表示したことで、自分や友達の考えを確認した上での話し合いをすることができた。

ペアトーク→全体交流

・中心発問に対して道徳ノートに書いた考えをペアトークにて交流した。似ている考えに線を引いたり、新たに気付いた考えを書き加えたりする中で、友達の考えにふれ、互いの考えを対話することができた。

“登場人物にアドバイスの手紙を書く”という形を通して

・より深めるための発問として、価値への理解を深めるために「正直でいるために、大切なことは何でしょう。正直に言おうか悩んでいる千一朗くんのお兄さん・お姉さんになったつもりで、アドバイスの手紙を書いてあげましょう。今日の授業で話し合ったことに関係があって、みんなが今までに経験したことが入っていると、分かりやすくなります。」と発問をした。本教材の主人公である千一朗に正直でいてもらうために、大切なことを書かせることで、価値への理解を深めることができた。

〔課　題〕

・事前にとったアンケート結果を、本時の導入で紹介することで、正直に言えない人の弱い心について、より身近に感じることができたのではないか。

・本教材の終末で、正直にお詫びに行って許してもらえた時のすがすがしさをしっかりと考えさせた方が、正直に生活することのよさを子どもたちがより実感できたのではないか。

・中心発問に対して、自分の考えを書いて、ペアトークをし、全体交流をする間の時間が予想よりもオーバーし、終末での振り返りの時間が十分に取れなかった。

〔今後の「改善・充実」に向けて〕

・導入において、人の心の弱さについて身近に感じることができるような発問等を意識していく。

・終末で、道徳的価値のよさについて実感できるよう、授業を組み立てていく。

・引き続き多様な方法を取り入れることを意識した授業改善を行う。その際、多様な学習方法の形だけが目的にならないよう、指導の意図に即して、取り入れることが適切か否かしっかり吟味していく。

Ⅳ　実践事例⑤

「情報モラルと現代的な課題に関する指導」

＜甲山中学校＞

- 学　年　　第３学年
- 主題名　　「海や陸の豊かさを守るために」【Ｄ：自然愛護】
- ねらい　　一漁師の思いや多くのボランティアの人々の日本海をよみがえらせる行動を通して、自然を愛し感謝する心や、自然環境を守りぬこうとする態度を育てる。
- 教材名　　「よみがえれ、日本海！」（「新しい道徳　３」（東京書籍））
- 主題設定の理由

〔主題観〕

本主題は、「中学校学習指導要領　解説　特別の教科　道徳編」の【Ｄ：自然愛護】「自然の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然愛護に努めること」に基づくものである。

人間は自然から様々な恵みを受けるとともに、自然災害などからの「恐れ」や「緊張」も受けながら、自然とともに生活してきた。人間も自然の一部であるという視点から、その恩恵に感謝し、自然愛護に努めることで、自然との共生を続けてきた。

一方で、自分達の発展を考えるあまり、環境破壊や環境汚染を続けてきた歴史もある。近年問題になっている地球温暖化や気候変動、生態系の変化はその一因であろう。また、このような大きな問題に対して、人間一人一人の力はあまりにも小さく、個人のレベルでは「どうしようもない」と感じてしまうこともあるだろう。

しかし、何かを変えるためには、自然の中で生きる人間一人一人の意識と行動の変化が必要なはずである。自然との共存、共生を考えた時、今、自分たちにできることは何かを考えさせたいと思い、本主題を設定した。

〔生徒観〕

本授業を実施するにあたって主題に関する意識調査を行った。本学級の生徒は「身近な自然を大切にしている」という項目に 90%以上の生徒が肯定的に回答するなど、自然愛護に関する意識が高い。一方、「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）について知っている」と答えた生徒は 10%と少なかった。自然環境を大切にしようという意識は持っているが、現代的な課題には関心が薄く、環境問題を自分事として捉えることができていないと考えられる。

〔教材観・指導観〕

本教材は、1997 年１月、日本海で沈没したロシアのタンカー、ナホトカ号から流出した重油で、一面が油泥の海と化した福井県三国町の海岸を、地元の漁師とボランティアが、美しい海によみがえらせたという実話であり、人々の行動から自然愛護の精神が伝わってくる内容である。指導に当たっては、重油の撤去作業にあたった延べ 30 万人のボランティアの思いを考えさせることで、自然と人間の関わりの中から、自然の崇高さや、自然環境を大切にすることの意義を理解させる。その後、海や陸の豊かさを守るために自分たちが意識すべきことについて話し合わせ

ることで、教材の問題を自分事として捉えさせ、自然を愛し感謝する心や、自然を守り抜こうという道徳的態度を育てたい。

本校のテーマとする「現代的な課題に関する指導」については、導入でＳＤＧｓ「14　海の豊かさを守ろう」を取り上げ、本時のテーマとして掲げることで、教材を単なる過去の話としてではなく、身近な環境問題として捉え、考えさせるようにする。

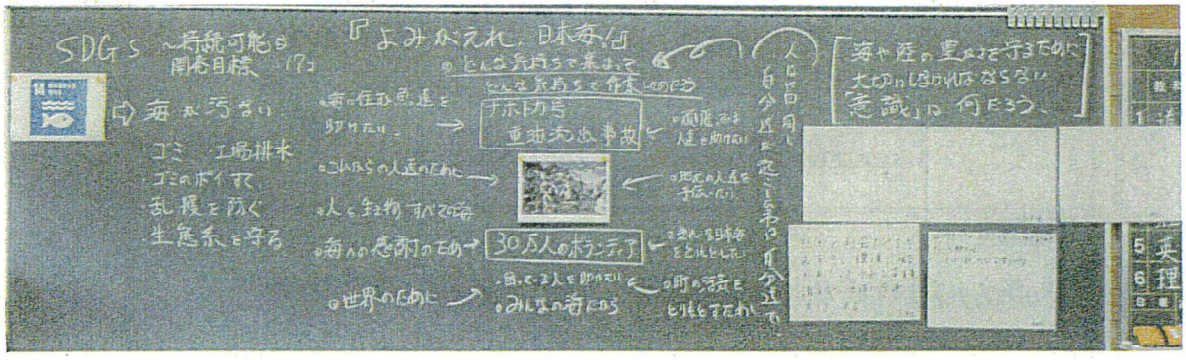
● 準備物　　教材、ワークシート、ホワイトボードセット

● 学習指導過程

	学習活動	主な発問と予想される生徒の心の動き	指導上の留意点 （☆評価の観点）
導入	1　ＳＤＧｓについて知り、その内容について考える。	○「ＳＤＧｓには『海の豊かさを守ろう』という目標が設定されています。この目標はどんな問題の解決を目指して設定されているのでしょう。」 ・海洋汚染（工業廃水、埋め立て） ・生態系の変化（乱獲） ・海温上昇（地球温暖化） ○「今日は『海や陸の豊かさを守るために』というテーマについて考えましょう。」	※ＳＤＧｓについての認知度が低いため、概要を丁寧に説明し、現代社会の抱える環境問題を振り返らせる。
展開	2　教材を読み、内容を確認する。 3　ボランティアたちの思いを考える。	○「教材の『海の豊かさを守る活動』で、印象に残ったのはどこですか」 ・吉春さんの強い意志と行動 ・全国から集まったたくさんのボランティア ・サーファーたちの行動 **◎中心発問** **「３０万人のボランティアは、どんな気持ちで集まり、作業を続けたのだろう** ・きれいな海を取り戻したい。 ・吉春さんたちの力になりたい。 ・人間のあやまちは人間の手でおさめなければならない。 ・自分たちを育ててくれる海への感謝や恩返し。	※印象に残ったことを聞くことで、読後の余韻を大切にしながら、本時のテーマとつなげて内容を整理する。 ※重油の撤去作業にあたった人の思いを考えさせることで、自然と人間の関わりの中から、自然の崇高さや、自然環境を大切にすることの意義を理解させる。

展開	4　テーマについて話し合う。 【ホワイトボードミーティング】 ①個人思考 ②グループ交流 ③全体交流	＊より深めるための発問 「海や陸の豊かさを守るために、意識すべきことは何だろう。」 ・自然も命。限りがあるということ。 ・人間も自然の一部である。 ・自然に生かされていることへの感謝 ・自然との共生、共存	※自分たちが意識すべきことについて話し合わせることで、教材の問題を自分事として捉えさせ、自然を愛し感謝する心や、自然を守り抜こうという道徳的態度を育てる。
終末	○本時の学習を振り返る。	○「この教材を通して考えたことを書きましょう。」 ・自然の中で自分たちが生かされているのだということを忘れないようにしたい。 ・自然に感謝の気持ちを持ち、その保全のために自分たちにできることを探したい。	☆自然と人間の関係について自分なりの意見を持ち、自分にできることについて考えている。

● 板書例



● 成果と課題

〔成　果〕

・道徳教育全体計画（別葉）を参照しながら、各教科の学習内容と本時のテーマとのつながりを確認した。理科では生態系について学習しており、社会では今後、ＳＤＧｓについて学習するということから、理科での学習を振り返りながら考えを深め、社会の学習に生かすことができるよう、ねらいを設定した。

・授業の初めにテーマを生徒に提示し、授業の講談でテーマについて話し合うという展開にすることで、生徒に課題意識を持たせることができた。また、テーマについて話し合う場面ではホワイトボードミーティングの手法を活用することで、生徒から多様な意見を引き出すことができた。

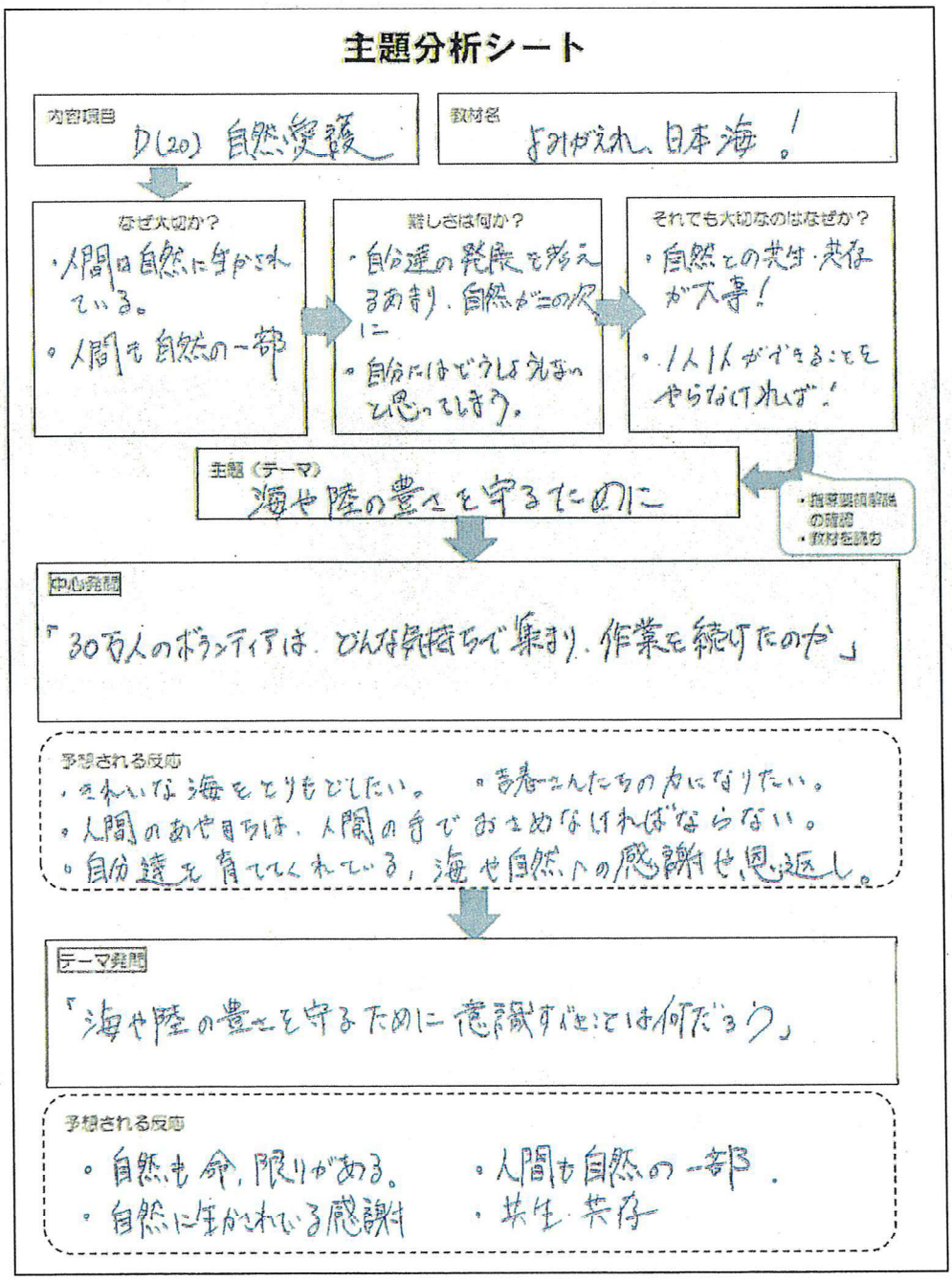
〔課　題〕

・本時の内容項目は『自然愛護』であるが、中心発問において「ボランティアの思い」を考えさせたことで、『社会参画』への意義について考えを深めようとしている生徒が多かった。ボランティアという言葉を用いず、「日本海をよみがえらせる活動を行った人」などと言い換えるだけで、ねらいとする部分について考えやすくなったのではないかと思う。

〔今後の「改善・充実」に向けて〕

・ＳＤＧｓなどの現代的な課題を教科書教材と併用していくことは生徒に課題意識を与えるうえで非常に重要である。その際、テーマについて教材のどの部分をもとに考えさせるのか、どのように問いかければ生徒が考えやすくなるのかをしっかりとイメージしておくことが大切である。

【参考資料】本時の計画段階で作成した主題分析シート



Ⅳ　実践事例⑥

「多様な考え方を生かすための言語活動」

＜世羅中学校＞

- 学　年　　第１学年
- 主題名　　「差別や偏見をなくすために」【Ｃ：公正、公平、社会正義】
- ねらい　　新型コロナウイルス感染症に関連する差別や偏見について考えることを通して、だれに対しても公正に接し、差別や偏見のない社会をつくろうとする道徳的実践意欲を育てる。
- 教材名　　「新型コロナウイルスの３つの顔を知ろう！」（日本赤十字社作成資料一部改作）
- 主題設定の理由

〔主題観〕

本主題は、「中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』の内容項目【Ｃ：公正、公平、社会正義】「正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。」に基づくものである。とりわけ中学校の段階では、周囲で不公正があっても、多数の意見に同調したり傍観したりするだけで、制止することができないことがある。そうした自分の弱さに向き合い、必要に応じて自分の意志を強くもち、正義と公正を実現するために力を合わせて努力することや、自分と同様に他者も尊重し、だれに対しても公平に接することが、差別や偏見のない社会につながっていくということに気付かせるために本主題を設定した。

〔生徒観〕

本学年の生徒は、明るく活発な生徒が多い。しかし、特定の人間関係のみで交流が完結し、人間関係が希薄な面がある。また、周囲で不公正があっても、多数の意見に同調したり傍観したりすることがある。

〔教材観・指導観〕

本教材は、日本赤十字社作成資料「新型コロナウイルスの３つの顔を知ろう！」をもとに本校が作成したものである。新型コロナウイルス感染症に関連した差別の事例から、人間のもつ弱さに向き合わせ、適切な行動を実践する大切さも理解できる教材である。

指導に当たっては、次の２点に重点を置く。

１点目に、道徳的課題に対する問題意識を高めるために、実際に相談が寄せられた新型コロナウイルス感染症に関する差別の事例を掲示する。だれの身にも起こり得る深刻な問題であることを意識させたい。

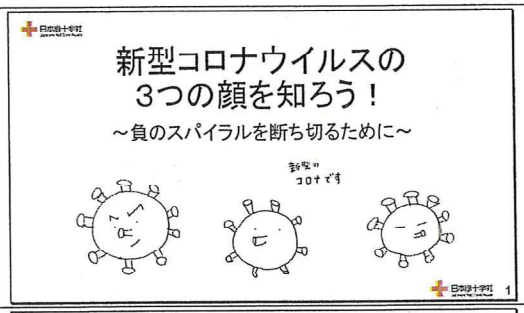
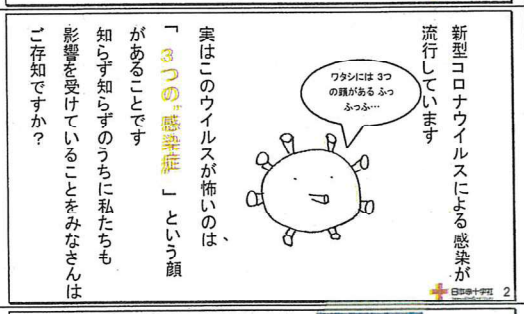
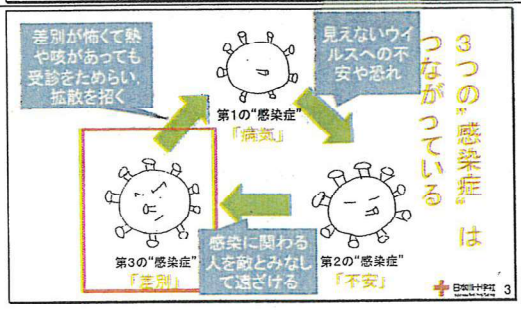
２点目に、道徳的な感情を道徳的な行動に結び付けるために、終末を工夫する。本時では、フライデーオベーションやエッセンシャルワーカーの仕事を伝える動画を紹介する。動画視聴を通して、一斉拍手で医療従事者をたたえ、感謝の気持ちを表現する方法もあることを伝え、「自分にもできることがある。」という気持ちをもたせたい。また、感染リスクにさらされながらも私達の命を守るために働く方々の存在について知ることで、私達の日常が多くの方々によって支え

られていることに気付かせたい。

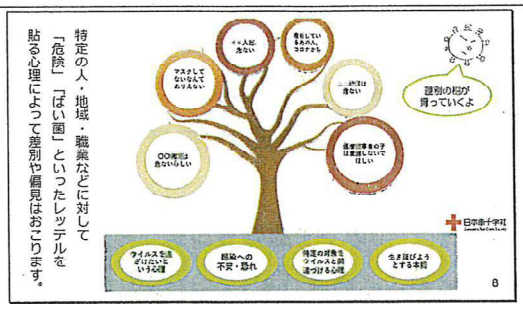
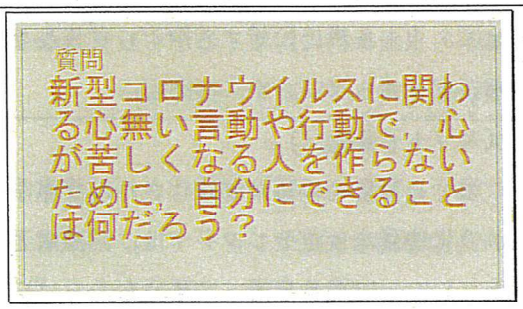
本校の道徳科の研究テーマ「多様な考え方を生かすための言語活動」に関しては、切り返しの発問を工夫する。

● 準備物　ワークシート、パソコン、大型テレビ

● 学習指導過程

		○主な発問　・予想される心の動き　☆評価の観点
スライド1		新型コロナウイルスのことについて、これから勉強していきたいと思います。
スライド2		さて、これから新型コロナウイルスの３つの「感染症」という顔のことを勉強していきましょう。 （スライドの文章を読む。）
スライド3		それぞれの３つの感染症は、このようにつながっています。 第１の感染症は●「病気」そのものです。感染すると、風邪症状や重症化して肺炎を引き起こすことがあります。第２の感染症は●「不安」です。このウイルスは見えません。ワクチンや薬もまだ開発されていません。わからないことが多いため、私たちは強い不安や恐れを感じ、振り回されてしまうことがあります。第３の感染症は●「差別」です。不安や恐れは、人間の生き延びようとする本能を刺激します。そしてウイルス感染に関わる人や対象を日常生活からと遠ざけたり、差別したりするなど、人と人との信頼関係や社会のつながりがこわされてしまいます。 このように、●「見えないウイルスへの不安や恐れ」が●「感染に関わる人を敵とみなして遠

		ざける」という差別につながり、●「差別が怖くて熱や咳があっても受診をためらい、拡散を招く」という『負の連鎖』も広がっているのです。 今日は、この中でも新型コロナウイルスの「3つの感染症」の●「差別」について、みんなで学んでいきましょう。
スライド4	新型コロナウイルスに関する差別を知っていますか？	現在、新型コロナウイルス感染症に関連して、感染した方々やご家族、治療にあたった医療関係者の方々等に対する不当な差別、偏見、いじめ、誹謗中傷、また、営業を続ける店舗や他の地域から来た車両に対する嫌がらせ行為などの相談が寄せられています。例えば、
スライド5	①ばい菌扱いされる。	（スライドを読む。） 医師と看護師の感染が確認された兵庫県小野市の北播磨総合医療センターでは、感染者と接触していない職員や患者、家族らから「ばい菌扱いされた」「勤務先から出勤停止と言われた」などの訴えが相次ぎました。（東京新聞）
スライド6	②他県ナンバーの車を写真撮影し，SNS上で公開される。	（スライドを読む。）
スライド7	③子どもの通園や通学を拒まれる。	（スライドを読む。） なぜ、このようなことが起きるのでしょうか。差別をする側の気持ち、された側の気持ちはどうでしょうか。

スライド8		たくさんの事例をまとめると、このようになります。特定の人・地域・職業などに対して、「危険」「ばい菌」といったレッテルを貼る心理によって差別や偏見は起こります。 誰の心にも「ウイルスをさけたいという心理」「感染への不安・恐れ」「特定の対象をウイルスと関連付ける心理」「生き延びようとする本能」があります。 だからといって、さきほどのような心無い行動や言動があるとどうでしょうか。病気以外でも心が苦しくなる人を作ってしまいませんか？
スライド9		◎（スライドを読む。） 【予想する生徒の発言例】 ・（差別的な言動・行動に対して）注意する。 ・（差別的な言動・行動に対して）同調しない。 ・不確かな情報を広めない。うわさ話をうのみにしない。 ・医療に携わる人など専門職に感謝する。 【切り返し例】 ・でも、実際にクラスの仲間が差別される場面に出会ったら、本当にその行動がとれますか？ 【予想する生徒の発言例】 ・難しい。その場の空気に流されてしまうかもしれない。（人間の弱さ） ・感謝の気持ちをどう伝えたらいいか分からない。（具体的な方法が分からない） 【切り返し例】 ・そうなると、差別の輪がどんどん広がって、みんなの心が苦しくなってしまいませんか。でも、注意したりするのは怖い。では、どうしたらいいでしょうか。 【予想する生徒の発言例】 ・やっぱり勇気を出して、いけないことはいけないって言える人になりたい。 ・その場で注意できなくても、後でその子に「味

		方だよ」と声をかけて、安心させてあげることならできるかもしれない。 ・団結する。一人で立ち向かわない。 ・話題を変えて、みんなで楽しい話をする。
スライド10	こんな取組もあります！	・医療従事者をたたえる一斉拍手の動画 ・エッセンシャルワーカーの仕事を知る動画 ・ウイルスに関する負の連鎖を示した後、解決策の一部を示す動画（日本赤十字社）等を紹介する。
スライド11		授業を通して、学んだことや考えたことを書きましょう。

● 板書例

「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！」

事例①
（する側）・感染したら嫌だな。
（される側）・感染していないのに。つらい。

事例②
（する側）・うちの地域は感染者0だから、他県から来ないで。
・感染拡大地域のナンバーだと怖い。
（される側）・仕事で来ているのに…。

事例③
（する側）・医療従事者の子どもは濃厚接触者かも。
（される側）・医療現場はひっ迫していて休めない。
・我が子は誰に見てもらえばいいの。

◎新型コロナウイルスに関わる心無い言動や行動で、心が苦しくなる人を作らないために、自分にできることは何だろう。

・（差別的な言動・行動に対して）注意する。
・（差別的な言動・行動に対して）同調しない。
・不確かな情報を広めない。うわさ話をうのみにしない。
・医療に携わる人など専門職の方に感謝する。

● 成果と課題

〔成　果〕

・報道等でコロナ差別が社会問題となる中、教員一人一人がコロナ差別について知っている情報を持ち寄って教材を作成することができた。全学級で道徳の授業を行う「全校道徳」を実施することができた。

・休業明けの６月に全学級で授業を行う「全校道徳」を実施することができた。また、授業後も、折に触れて、本教材での学びを差別や偏見の芽を摘む指導に役立てることができた。
（知的障害特別支援学級は、学級活動で実施。）

・切り返し発問として、「でも、実際にクラスの仲間が差別される場面に出会ったら、本当にその行動がとれますか。」を設定することで、生徒が自分事として考えることができた。

〔課　題〕

・「全校道徳」に向けた取組を通して、職員間で道徳科と関連させた話す機会が増えたが、教科間の関連を意図的に図ることは十分ではない。

〔今後の「改善・充実」に向けて〕

〇カリキュラム・マネジメントを推進し、道徳教育を推進させる。

・道徳教育全体計画（別葉）を作成して、各教科等における道徳教育との関連を明確にするとよい。道徳教育全体計画（別葉）を基に、複数の教員で道徳科の授業づくり及び各教科との関連について協議する場を設定する。

Ⅳ　実践事例⑦

「家庭や地域社会との連携による指導」

＜世羅西中学校＞

- 学　年　　第１学年
- 主題名　　「心に郷土を刻もう」【Ｃ：郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度】
- ねらい　　伝統工芸士広川さんとの出会いから、郷土への思い深める「私」に共感し、郷土の伝統を大切にし、郷土に尽くした先人に尊敬の念を深め、郷土の発展に努めようとする道徳的な態度を育てる。
- 教材名　　「郷土を彫る」（「新しい道徳　１」（東京書籍））
- 主題設定の理由

〔主題観〕

本主題は、「中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」の内容項目【Ｃ：郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度】「郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。」に基づくものである。わが国においては、都市化が進む一方で過疎化が進んでおり、郷土に対する愛着や郷土意識が希薄になっている傾向が見られる。このことは世羅町においても例外ではなく、過疎化が進み生徒数も減少が続いている。しかしながら、本校の生徒は伝統芸能として「明神の舞」を引継ぎ、郷土や学校に対する意識が高い。郷土の祖先と現在の自分とのつながりを感じることで、 自分が過去と未来とをつなぐ存在であることを気付かせ、地域社会の一員としての自覚をもてるようになってほしいと願い、本主題を設定した。

〔生徒観〕

本学級の生徒は、「私は『明神の舞』は世羅西中の誇りだと思う」（学校生活アンケート）という問いに、全員が肯定的な回答をしており、学校の伝統に対する愛着が強い。また、地域から学校外部の指導者を招くことや、「明神の舞」を本校の文化発表会や世羅西の各地区で披露する活動を通して、郷土や地域に接する機会が多く、郷土を意識する場面が多い。

〔教材観・指導観〕

本教材では、「私」が地域を知る学びを通して、新たな気付きに触れ、「私」の中の郷土を大切に思う気持ちが芽生えていく。その後、宮島を訪れ、伝統工芸である「宮島彫り」に携わる広川和男さんからの話を聞き、その強い思いに感銘を受ける。地域の伝統に携わる人々の郷土への思いを、生徒にとって身近な伝統芸能である「明神の舞」と重ねて考えさせたい。

指導に当たっては、小グループでの話し合いの場面を取り入れることで、全員が考えを伝えることができるようにする。この際、自分の考えの根拠も示し、自分の考えと他者の考えの違いについても意識するよう指導する。次に各グループ内の意見を全体の場で発表し、他の班の意見を聞く。

本校の研究テーマ「家庭や地域社会との連携による指導」に関しては、今年度は新型コロナウイルス感染症の流行もあり、難しい部分があった。「明神の舞」は、世羅西中学校の伝統文化伝承

活動であり、毎年地域の敬老会でも披露されるなど、地域との関わりが深い。「明神の舞」の活動を想起させることで、地域社会について考えることができる。

● 準備物　　ワークシート、写真（明神の舞の様子）

● 学習指導過程

	学習活動	○主な発問　　・予想される心の動き	指導上の留意点 ☆評価の観点
導入	1　「明神の舞」を振り返る。（写真）	○「明神の舞」の活動を思い出しましょう。	※「明神の舞」の取り組みを想起させる。
展開	2　「郷土を彫る」を範読する。	○「私」の郷土への負のイメージを、大切に思う気持ちへと転換させたものは何だろう？ ・学習を通して、新たにその良さを理解できたから。 ・地域の人たちと接し、語らい、新たな気付きを見いだせたこと。 **◎中心発問** **「広川さんが『私の宮島彫りは日本一だ。』という自信があるのだよ。」と語っているのは、どのような思いからだろう。」** ・技術に自信がある。 ・宮島彫りは私の人生そのもの。 ・宮島彫りと宮島の歴史を大切に思う。 ・宮島への思いが日本一だから。	※地域との距離を縮め、自分事として捉えようとする雰囲気づくりに努める。 ※個人思考→グループ思考をする。 ※意見をまとめるのではなく、他者の意見を受容する態度で話し合うように指導する。
	3　郷土を見つめ直す。	○「明神の舞」で継承していきたいことは何ですか。 ・これまでの先輩たちの思い。 ・地域の方々などへの感謝。 ・お客さんを圧倒する踊り。	☆郷土の伝統を大切にし、発展につとめようと自分にできることについて考えている。（ワークシート）
終末	4　学習のまとめをする。	○自己評価をワークシートに書きましょう。	※本時の自己評価をまとめさせる。

板書例

郷土を彫る

○「私」の郷土への負のイメージを、大切に思う気持ちへと転換させたものは何だろう？

・郷土の人たちの知ってもらいたいという思いが伝わったから。

・郷土の良さを教えて下さった地域の優しさに触れたから。

○広川さんが『私の宮島彫りは日本一だ。』という自信があるのだよ。」と語っているのは、どのような思いからだろう。

・宮島への思いは誰にも負けないから。

・宮島彫りへの熱い気持ちは誰にも負けない。

○明神の舞で継承していきたいと思うことは何ですか。

・三年生の思いや感謝。

・堂々かつきれいな舞で、お客さんを圧倒する踊り。

・練習から本気で取り組むなどの良い雰囲気。

成果と課題

〔成　果〕

・「明神の舞」の世代交代の時期に実施ができたことで、郷土の伝統や文化を意識し、尊重していこうという意識が高まった。また、自分のこととして考えることにも効果的であった。

・グループ活動によって、普段発言が少ない生徒も発言しやすくなった。

〔課　題〕

・前半に時間が掛かりスムーズに授業展開ができなかったことで、生徒自身がどのように郷土に関わっていくことができるのか、引き出すことが十分にできなかった。

・学級全体で発言が少なく、発言を引き出す発問の仕方ができていない。

〔今後の「改善・充実」に向けて〕

・郷土の発展のために何ができるのか、生徒から多くの意見を引き出し、様々な視点からの意見に触れさせることで、考えを深めさせていく。

・生徒の考えを引き出す発問を考えていく。

・発言が苦手な生徒でも、意思表示のできるもの（心情円など）を活用する。